

# 外 国 語

## 1 科目編成

改 訂		現 行	
科 目 名	標準単位数	科 目 名	標準単位数
オーラル・コミュニケーションⅠ	2	英 語 Ⅰ	4
オーラル・コミュニケーションⅡ	4	英 語 Ⅱ	4
英 語 Ⅰ	3	オーラル・コミュニケーションA	2
英 語 Ⅱ	4	オーラル・コミュニケーションB	2
リーディング	4	オーラル・コミュニケーションC	2
ライティング	4	リーディング	4
外国語に関する学校設定科目		ライティング	4
		ドイツ語	
		フランス語	
		外国語に関するその他の科目	

## 2 改訂の基本方針

教育課程審議会の答申の趣旨に沿って、外国語科の学習指導要領の改訂に当たっては、次の三つを基本方針としている。

- (1) これからの国際社会に生きる日本人として、世界の人々と協調し、国際交流などを積極的に行っていけるような資質・能力の基礎を養う観点から、外国語による実践的コミュニケーション能力の育成にかかわる指導を一層充実する。その際、外国語の学習を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度と、視野を広げ異文化を理解し尊重する態度の育成を図る。
- (2) 実践的コミュニケーション能力の育成を図るため、言語の実際の使用場面に配慮した指導の充実を図る。
- (3) 国際化の進展に対応し、外国語を使って、日常的な会話や簡単な情報の交換ができるような基礎的・実践的なコミュニケーション能力を身に付けることがどの生徒にも必要になってきているとの認識に立って、中学校及び高等学校の外国語科を必修とすることとする。

以上の基本方針を踏まえ、四つの領域の言語活動の有機的な関連を図った指導を展開する中で、実践的コミュニケーション能力を育成するために、科目構成及び内容について次のような改善を図った。

- (1) 科目の構成を上記「1 科目編成」のように改めるとともに、必修科目については、英語を履修する場合は、「オーラル・コミュニケーションⅠ」及び「英語Ⅰ」のうちから選択的に履修することとした。
- (2) 実践的コミュニケーション能力の育成を重視する観点から、「オーラル・コミュニケーションⅠ」（2単位）及び「オーラル・コミュニケーションⅡ」（4単位）を設けた。
- (3) 選択必修科目である「オーラル・コミュニケーションⅠ」、「英語Ⅰ」の内容は次のとおりとした。

- ア 「オーラル・コミュニケーションⅠ」は、中学校の学習を踏まえ、「聞くこと」及び「話すこと」の音声によるコミュニケーション活動の指導を重点的に行うことをねらいとした内容とする。その際、例えば、情報や自分の考えなどを整理して発表したり、話し合うなどの発表能力や表現能力を育成するために、簡単なロール・プレイ、スピーチ、ディスカッションなどやそれらの基礎になる活動を含めるようにする。
- イ 「英語Ⅰ」は、中学校の学習事項の一層の習熟を図り、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の四つの領域を総合的、有機的に関連付けたコミュニケーション活動の指導を行うことをねらいとして内容を構成する。

### 3 改訂の内容

#### (1) 目標

現行の学習指導要領の外国語科の目標を踏まえつつ、改訂の基本方針の趣旨に沿って、次のように目標を定めた。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

この目標は次の三つの要素から成り立っている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める。
- ② 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

これら三つの要素は、現行の学習指導要領とほぼ同じものであり、基本的に同じ方向での目標の達成を目指していると言える。ただし、今回は、③の実践的なコミュニケーション能力の育成を中心的な目標としている。その実践的コミュニケーション能力を定義しているのは、「情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする」の部分である。

①の「言語や文化に対する理解」や、②の「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」は、現行の学習指導要領と同様に、国際化の進展に対応し国際社会の中に「生きる」ために必要な資質を養うという観点において、重要な目標である。しかし、実践的コミュニケーション能力そのものが、現実的な場面で実際に言語を使用する能力を意味し、コミュニケーションへの積極性や異文化を理解し、尊重する態度に支えられながら、同時に、それらを一層発展させる中心的能力として位置付けられるので、これら積極的態度の育成や異文化理解などの目標に配慮しつつ、実践的コミュニケーション能力の育成に最重点を置いて指導するという教科目標とした。

#### (2) 各科目

##### ア 目標

各科目の目標については、外国語科の目標を受けるとともに、中学校での学習目標

を發展させ、それぞれの科目の内容を適切に表現する内容に改めた。

すなわち、各科目の目標は、「理解や表現の能力の育成」と「積極的にコミュニケーションを図る態度の育成」の二つの要素を基本とし、それに科目の特徴に応じて「話題」などの要素を加えて構成した。

「理解や表現の能力の育成」に関しては、外国語科の目標を受け、各科目とも「情報や考え」という「意味内容」を伝え合うことが実践的コミュニケーション能力の中核となることを明確にした。

「積極的にコミュニケーションを図る態度の育成」については、全ての科目において目標として位置付けるとともに、特に「リーディング」及び「ライティング」では、「この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」のように、「この能力を活用して」という表現を加えることで、学習する際に積極的に読んだり、書いたりする態度を育成すると同時に、学習で身に付けた能力をその後のコミュニケーションに積極的に生かすことも念頭に置いた目標とした。

(ア) 「オーラル・コミュニケーションⅠ」の目標

日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

(イ) 「オーラル・コミュニケーションⅡ」の目標

幅広い話題について、情報や考えなどを整理して英語で発表したり、話し合ったりする能力を伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

(ウ) 「英語Ⅰ」、「英語Ⅱ」の目標

日常的な（幅広い）話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える基礎的な能力を養う（更に伸ばす）とともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

（下線部分は「英語Ⅰ」、（ ）内は「英語Ⅱ」）

(エ) 「リーディング」の目標

英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解する能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

(オ) 「ライティング」の目標

情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

## イ 内容

内容については、実践的コミュニケーション能力の育成を効果的に図るため、現行の「言語活動」と「言語材料」の二つに分けている示し方を変更し、(ア)「言語活動」(イ)「言語活動の取扱い」、(ウ)「言語材料」の三項目で構成し、それぞれの項目で大きく記述の内容や方法を改善した。

### (ア) 言語活動

現行の学習指導要領において、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の四つの領域に分けて言語活動を示していることを改め、四つの領域相互の有機的な関連を図ったコミュニケーション活動として示した。

また、各科目の言語活動に「生徒が情報や考えなどの受け手や送り手になるように具体的な言語の使用場面を設定し、次のようなコミュニケーション活動を行う。」という記述をし、コミュニケーション活動を行う際の基本的な条件を明確にした。

その条件とは、次の3点である。

- ① 情報や考えなどを伝え合うことを活動の中心とすること。
- ② 生徒が情報や考えなどの受け手、送り手として機能すること。
- ③ 具体的な言語の使用場面を設定すること。

また、各科目において次のような言語活動を示した。

科 目	言 語 活 動
オーラル・コミュニケーションⅠ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語を聞いてその内容を理解するとともに、場面や目的に応じて適切に反応する。</li> <li>・関心のあることについて相手に質問したり、相手の質問に答えたりする。</li> <li>・情報や考えなどを、場面や目的に応じて適切に伝える。</li> <li>・聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどをまとめ、発表する。また、発表されたものを理解する。</li> </ul>
オーラル・コミュニケーションⅡ	<p>「オーラル・コミュニケーションⅠ」の内容に加えて、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スピーチなどまとまりのある話の概要や要点を聞き取り、それについて自分の考えなどをまとめる。</li> <li>・幅広い話題について情報や考えを整理し、効果的に発表する。</li> <li>・幅広い話題について、話し合ったり、討論したりする。</li> <li>・スキットなどを創作し、演じる。</li> </ul>
英 語 Ⅰ 英 語 Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語を聞いて、情報や話し手の意向などを理解したり、概要や要点をとらえたりする。</li> <li>・英語を読んで、情報や書き手の意向などを理解したり、概要や要点をとらえたりする。</li> <li>・聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。</li> <li>・聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、整理して書く。</li> </ul>
リーディング	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まとまりのある文章を読んで、必要な情報を得たり、概要や要点をまとめたりする。</li> <li>・まとまりのある文章を読んで、書き手の意向などを理解し、それについて自分の考えをまとめたり、伝えたりする。</li> <li>・物語文などを読んで、その感想などを話したり、書いたりする。</li> <li>・文章の内容や自分の解釈が聞き手に伝わるように音読する。</li> </ul>
ライティング	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞いたり読んだりした内容について、場面や目的に応じて概要や要点を書く。</li> <li>・聞いたり読んだりした内容について、自分の考えなどを整理して書く。</li> <li>・自分が伝えようとする内容を整理して、場面や目的に応じて、読み手に理解されるように書く。</li> </ul>

(イ) 言語活動の取扱い

a 指導上の配慮事項

言語活動として示したコミュニケーション活動を効果的に行うため、発音、文型・文法事項、非言語手段などに関する指導を行うことを示した。また、指導上の配慮事項として掲げた項目を「必要に応じて」行うべきものであることを明確に示し、コミュニケーション活動と指導上の配慮事項との関連を明らかにした。

b 言語の使用場面と働き

〔言語の使用場面の例〕及び〔言語の働きの例〕から適切なものを選択し、それらを有機的に組み合わせて活用することで実際に言語を使用する幅広い言語活動を行うことを示した。

また、それぞれの科目の特徴に応じて、言語の使用場面または働きのグループのうちどれを積極的に取り上げるように配慮すべきかを示した。

(ウ) 言語材料

a 英語言語材料

一括して〔英語言語材料〕を示し、各科目とも「原則として中学校及び高等学校の言語材料のうちから、それぞれの目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる。」こととした。

b 語

語については、各科目において次のように示した。

科 目	新 語 ・ 語 数
オーラル・コミュニケーションⅠ	「英語Ⅰ」の範囲内で、ふさわしいものを適宜選択する。
オーラル・コミュニケーションⅡ	「英語Ⅱ」の範囲内で、ふさわしいものを適宜選択する。
英 語 Ⅰ	中学校で学習した語に、400語程度の新語を加える。
英 語 Ⅱ	「英語Ⅰ」の語数に、500語程度までの新語を加える。
リーディング	「英語Ⅰ」の語数に、900語程度までの新語を加える。
ライティング	「英語Ⅰ」の範囲内で、ふさわしいものを適宜選択する。

(3) 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い

ア 指導計画の作成に当たっての配慮事項

(ア) 「オーラル・コミュニケーションⅡ」は「オーラル・コミュニケーションⅠ」を履修した後に、「英語Ⅱ」は「英語Ⅰ」を履修した後に履修させることを原則とすること。

(イ) 「リーディング」及び「ライティング」は、原則として、「オーラル・コミュニケーションⅠ」又は「英語Ⅰ」のいずれかを履修した後に履修させること。

イ 内容の取扱い

(ア) 教材の選定や題材の取扱いにおいて、実践的コミュニケーション能力の育成に配慮することを明確に示した。

(イ) 音声表記や辞書の活用、指導方法や指導体制等について外国語科の目標に沿って配慮事項を示した。

#### 4 質疑応答

問1 外国語が必修になったことをどのように受けとめ、指導に生かしたらよいか。

国際化の進展に対応し、外国語を使って日常的な会話や簡単な情報の交換ができるような基礎的・実践的なコミュニケーション能力を身に付けることがどの生徒にも必要になってきているという認識に立って、中学校及び高等学校の外国語科が必修となった。

生徒が生きる21世紀の国際社会を展望し、個人のレベルでも異文化間の様々なコミュニケーションが一層頻繁に行われるようになることを念頭に置き、この認識を再確認する必要がある。特に、外国語担当教員は、必修としての外国語教育の意義をしっかりと押さえる必要がある。

各高等学校においては、英語を履修させる場合は「オーラル・コミュニケーションⅠ」及び「英語Ⅰ」のどちらかを選択的に履修させることになっているが、科目選択に当たっては、これらの科目の特徴を十分理解したうえで、学校及び生徒の実態などを考慮して決定する必要がある。また、これらの一方を必修科目として設定し、他方を選択科目として、両方の科目を履修させることも考えられる。こうすることで、中学校での学習とより密接な連携をもたせた指導も可能となる。

なお、英語以外の外国語を履修させる場合は、学校設定科目として2単位以上の1科目を必修とする。

問2 実践的コミュニケーション能力を育成するにはどうしたらよいか。

実践的コミュニケーション能力は、言語の現実的な使用場面で実際に情報や考えを伝え合うことができる能力であり、新学習指導要領の外国語科の目標において中核となるものであるが、この能力を育成するには、実際にコミュニケーション活動を教室で展開する必要がある。これは、水泳ができるようになるには実際に水の中に入って練習することが、楽器を習うには実際に楽器に触れることが、必須であるのと同じことである。コミュニケーション活動が成立するためには、次の三つの要素が必要である。

- ① 情報や考えを伝え合うことを活動の中心とすること。
- ② 生徒が情報や考えの受け手や送り手となること。
- ③ 具体的な言語の使用場面を設定すること。

コミュニケーション活動には他の要素も考えられるが、指導計画を立てる際には、少なくともこれらの三つの要素をコミュニケーション活動の必須条件として、考慮する必要がある。コミュニケーション活動は「意味内容」を伝え合う活動であるが、これを効果的に行うには、発音、文型・文法事項、コミュニケーション方略、ジェスチャーなどを必要に応じて指導することが大切である。その際、外国語担当教員が、生徒の実態を観察して、どのような指導項目を、いつどのような方法で取り扱うかを適切に判断する必要がある。